

青森県立青森高校

シラバスで育ちのプロセスを具体化し、
コンピテンシー・ベースの「青高力」を育成

青森県立青森高校は、生徒への育成を目指す10の資質・能力を「青高力」と定義し、その到達度を測るための評価規準と尺度を示したルーブリックと、育成の過程を示したシラバスを作成した。現在は、その具現化に向け、授業と定期考査の改善、多面的評価のためのポートフォリオの構築に取り組んでいる。

●●● 全分掌、生徒も巻き込んで
ルーブリックの原案を作成

青森県立青森高校が、若手・ミドルリーダー中心の「プロジェクトチーム」を設置し、グラウンドデザインを策定したのは、2017年のこと。同校の綱領「自律自啓・誠実勤勉・和協責任」を踏まえ、育成を目指す10の資質・能力を「青高力」(図1)と定義し、各教育活動との関係を整理した(本誌18年4月号参照)。

18年度は、「青高力」の評価手法の開発、授業改善、多面的評価に着手した。その中で最大の課題は、「青

高力」を育成するために、生徒に何を学ばせ、成長をどう見取るかだった。そこでまず、学びの目的と手段を可視化(図2)。習得(分かる)↓活用I(できる)↓活用II(使える)↓探究(生み出す)の4段階とする「育ちのプロセス」を示した。その概念図を基に、「青高力」の10の資質・能力と関連する分掌を割りあて、ルーブリックの原案を作成した。大瀬幸治教頭は、その意図をこう語る。

「『青高力』の策定には教師全員がかかわり、共通理解はできていました。そこで、ルーブリックの作成では、『課題発見力』と『課題解決力』

は探究学習部、『原因分析力』と『自己実現力』は進路指導部といったように、資質・能力の内容に応じて各分掌が分担しました。教師一人ひとりが深く考えることで、生徒への育成を目指す『青高力』を具体的にイメージしてもらい、自身の指導に落とし込めるようにしました」

10月上旬、各分掌が1か月かけて作成した原案を並べ、水準や言い回しを比較して、違いが見られた部分を修正した。例えば、語尾が「でき」ではなく、「させる」となっていた場合など、教師主導の指導をイメージさせる言い回しを変えた。

青森県立青森高校

◎旧青森県立青森高校と旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた。綱領に「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」掲げる。2014年度に文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」、17年度に「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。

◎設立 1900(明治33)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2018年度入試合格実績(現浪計) 国

公立大は、北海道大、弘前大、東北大、東京大、一橋大、大阪大などに2006人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大学、明治大、早稲田大などに延べ145人が合格。

◎URL <http://www.aomori-hs.ac.jp/>



教頭
大瀬幸治
おせ・ゆきはる
教職歴31年。同校に赴任して2年目。



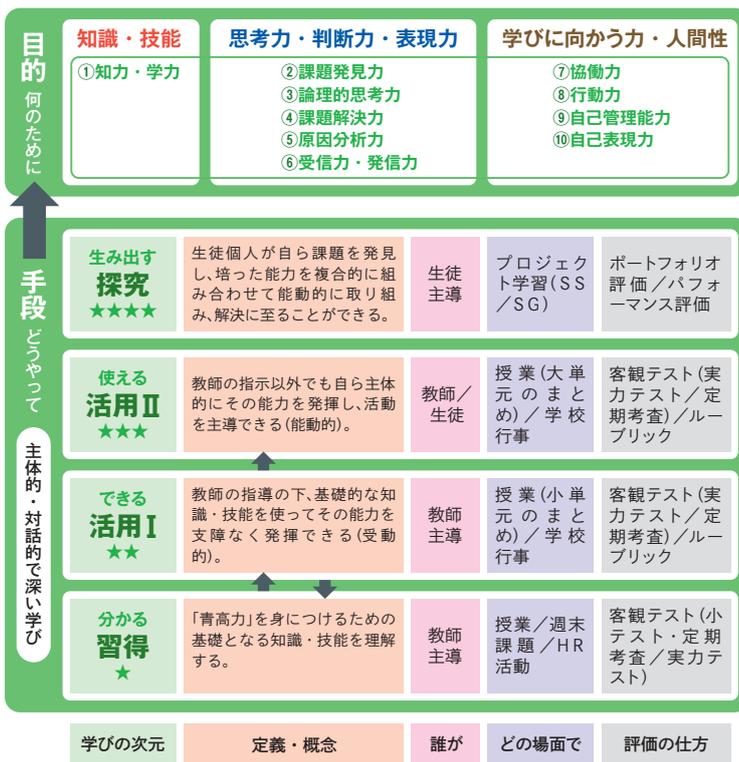
進路指導主事
笠井敦司
かさい・あつし
教職歴22年。同校に赴任して7年目。国語科。



1学年担任
市川泰斗
いちかわ・たいと
教職歴7年。同校に赴任して2年目。数学科。

ルーブリックの作成には、生徒も加わった。生徒指導部担当の「受信力・発信力」「協働力」「行動力」「自己管理能力」の原案を生徒会役員が作成したのだ。最初は評価規準を作ること戸惑っていた生徒たちが

図2 ルーブリック作成のための概念図(何のために、どうやって、誰が、どの場面で)



*学校資料を基に編集部で作成。

図1 目指す生徒像と育成を目指す資質・能力(青高力)

目指す生徒像

- 主体性と協調性をもって果敢に未来を切り拓く生徒
- 自己管理の態度と心身の健康に努める生徒
- 多様性を尊重し社会規範を遵守する生徒
- 主体的に課題を発見し、最適解を探究する生徒

育成を目指す資質・能力(青高力)

- ①知力・学力** 各教科の内容を理解し、それを活用する力及び技能
- ②課題発見力** 複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力
- ③論理的思考力** 客観的データや先行研究を踏まえ、自らの理論を筋道立てて構築する力
- ④課題解決力** 解決のための仮説を立て、それを実証するために行動する力
- ⑤原因分析力** 課題の背景や要因を、複数のデータに基づいて多角的な視点で捉える力
- ⑥受信力・発信力** 人の話を傾聴し様々な情報を受け取る力、自分の考えを分かりやすく相手に伝える力
- ⑦協働力** 他者の価値観を尊重しつつ他者と協力し、1つのものを成し遂げる力
- ⑧行動力** 自分の掲げる目的を達するために、主体的かつ計画的に実行する力
- ⑨自己管理能力** 基本的な生活習慣を確立し、健康と安全を意識して行動する力
- ⑩自己実現力** 社会の中で生きる自分を想像し、多くの情報を活用して実現させようとする力

*学校資料を基に編集部で作成。

が、生徒指導部の教師との対話を通して、自分たちが身につけるべき資質・能力を考え、生徒の誰もが理解できるよう何度も書き直し、完成させた。進路指導主事の笠井敦司先生は、生徒を参加させた理由をこう語る。

「『青高力』は、本校の綱領の1つである『自律自啓』に最終的にまともっていくものです。生徒がルーブリックの作成にかかわることで、自分たちがどうあるべきか、学校をどうしたいのかを考えさせ、生徒全員に『青高力』の意義を浸透させたいと考えました」

18年度の体育祭では、生徒会役員が行事の目的を述べた中に「青高力」を意識した発言があり、自分たちが身につけるべき資質・能力として「青高力」が定着した様子が見られた。

● シラバスに資質・能力の3つの柱で評価規準を示す

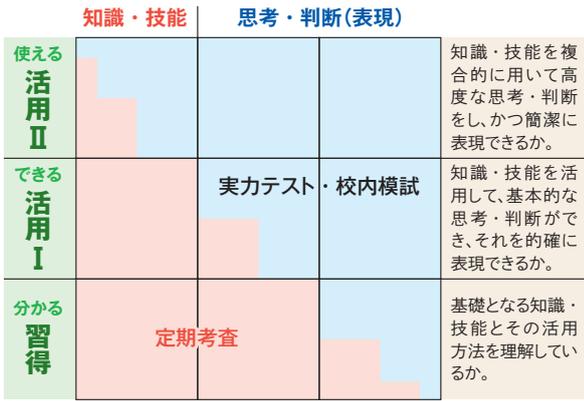
11月下旬のルーブリックの完成後には、シラバスを作成した。次期学習指導要領で示された資質・能力の3つの柱と「青高力」やルーブリックとをひもづけ、コンピテンシー・ベースの記述にしたことが特徴だ。

「本校の以前のシラバスはコンテンツ・ベースで、いつ、どんな学習を行い、どのように評価するのかを示した学習計画書でした。それを大きく変え、今自分が身につけている資質・能力はどのレベルなのか、どの資質・能力を重点的に伸ばせばいいのかを、生徒がメタ認知できるシラバスを目指しました」(笠井先生)

シラバスは、各科目ともA4版2枚とした(P.8図3)。1枚めには、資質・能力の3つの柱のそれぞれについて「習得・活用I・活用II」という到達度を示し、関連する「青高力」と評価方法を明記した。2枚めには、各学期の定期考査後に、成長したと思う点や課題を振り返り、次の目標を書く欄を設けた。そして、全教科・科目分を1冊にまとめて、19年4月、全校生徒に配布する予定。その後は、同校の教育のスタンダードとして受け継いでいく方針だ。

「かつては学年団主導でしたが、これからは学校全体がチームとして動いていかなければなりません。教師が異動しても、本校のスタイルがぶれずに確立されていることで、生徒や保護者からの信頼がさらに高まると考えています」(大瀬教頭)

図4 定期考査・実力テスト・校内模試の目的と構成



定期考査・実力テスト・校内模試それぞれの出題レベルとその比率を明確にし、教科・科目間で難易度のばらつきがなくなるようにした。
*学校資料を基に編集部で作成。

図3 1学年「国語総合」のシラバス(抜粋)

資質・能力の3つの柱の評価規準を示し、その科目の授業でどのように資質・能力を伸ばしていけばよいのかを、生徒がイメージしやすくした。

シラバスをベースに 授業と定期考査を変える

シラバスと連動して、授業と定期考査も変え、校内で行う3つの試験の目的と構成を再定義した(図4)。

「定期考査で教科の本質の理解を見る問題や初見の資料を扱った問題などを出すことで、生徒の学びの意識転換を図っています」(笠井先生)

ここでは、国語科と数学科の取り組みを紹介する。

◎国語科の取り組み

国語科では、授業内容の理解を基に、初見の文章を読み取る力を測ることをねらいとして、教科書本文と同じテーマで、生徒にとって初見となる課題文を示し、教科書の素材文との共通性を論じる問題を出した。

2学期末には、資料読解のグループワークを行い、学年末考査では少子化をテーマとした資料の読み取り問題を出した。その結果、社会問題に対する関心や資料を読み取る力に課題があることが分かり、授業でもその育成を重視するようになった。

◎数学科の取り組み

数学科の定期考査でも、初見の問題や問題文の読解力が求められる問

題を増やした。いずれも、定理・公式や解法を暗記するだけでは解くのは難しく、与えられた条件と既存の知識を結びつけたり、単元の本質を理解していないと解けない問題だ。1学年担任の市川泰斗先生は、出題のねらいを次のように語る。

「初見の問題でも、既習事項を活用して解けるかどうかを考えられるようにしたいと考えました。正答率は高くはありませんが、生徒の多くが、模擬試験で見慣れない問題が出て、動じなくなったようです」

プリントには、問題ごとにシラバスに示した「習得・活用I・活用II」を明記した。この問題は、「公式を活用する」「既習事項を組み合わせる」といったことがひとめで分かるため、到達目標を意識できると生徒に好評だ。また、単元の最後には「振り返りシート」を書かせて、その時の学習内容と既習事項との関連を意識させていると、市川先生は話す。

「数学では、問題が解けても、その単元の本質を理解できていない生徒が少なくありません。学習内容を振り返り、他分野との関連を考えることで、数学の見方・考え方をつかんでほしいと考えています」

図5 ルーブリックに基づいた自己評価シート(抜粋)

活動内容		1授業・定期テスト	2ゼミ活動	3部活動	4青高祭	5体育祭	6修学旅行	7遠足	8進路行事	9Mプロ・Sプロ	10その他(記述)
三つの時	青高力	定規	A (活用Ⅱ)	B (活用Ⅰ)	C (習得)	D (未達成)	評価 (A-D)	評価の理由	改善すべき活動(備考)		
知識・技能	知力・学力	各教科の内容を本理解し、それを活用する力及び技能	各教科・科目の学習内容を本理解し、それを活用する力及び技能	各教科・科目の学習内容を十分に理解し、教師の期待が合理的に思考したり、主体的に課題を探究することができる。	各教科・科目の学習内容を十分に理解し、教師の期待が合理的に思考したり、主体的に課題を探究することができる。	各教科・科目の学習内容を基礎・基本を理解し、教師に期待された学習活動に取り組むことができる。					
	課題発見力	複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力	自らが出した発見から、次の課題を設定する力	教師の支援があれば、社会的・学問的意義がある課題を設定できる。	教師の支援があれば、社会的・学問的意義がある課題を設定できる。	教師の支援があれば、必要課題を設定し、2Hの時間に取り組む力					

「青高力」のルーブリックの右端に記入欄を設け、生徒が評価規準を見ながら活動を振り返り、自己評価しやすいうようにした。*学校資料をそのまま掲載。自己評価シートの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

● ● ●
eポートフォリオで
振り返りを定期的に行わせる

18年度は、多面的評価にも着手し、独自に作成した自己評価シート(図5)を活用した。シートは、「青高力」のルーブリックに、自己評価とその

理由、資質・能力を高めた活動の記入欄を設けたものだ。18年度は、年度末に記入させたが、19年度からは学期に1回の記入を検討している。

「18年度は、『仲間と協力できたから、協働性はA』というように、甘く評価する傾向が見られました。19年度は、客観的に評価するポイントを知り、メタ認知能力を高めることが課題です」(市川先生)

「Classi」(*1)によるeポートフォリオの活用も進めている。定期考査と学校行事の振り返りを必須とし、生徒が個別に行うSGH(*2)の活動なども入力させるようにした。また、課題配信機能のテンプレートを活用したところ、記入率が格段に上がったと、市川先生は語る。

「そのテンプレートには、『よかつたこと』『今後の活動に生かすこと』など、振り返りの観点が示されています。振り返りがしやすくなり、回数を重ねる度に入力する量も質も上がっていききました」

19年度は、振り返りの結果をどのように次の行動に移させるかが課題だ。担任が面談で行動の変容を促したり、朝自習の計画を自分で立てさせるなどの方策を検討している。

● ● ●
組織改編で機動力の向上と
スムーズな意思決定を実現

そうした一連の改革を牽引してきたのが、管理職、教科主任、分掌主任から成る「キャリア教育委員会」だ。以前は、教育課程委員会と進路指導委員会がそれぞれの活動を担当していたが、高大接続改革によって迅速な意思決定が必要になったことを機に、16年度に2つの委員会を統合し、キャリア教育を統括する組織として、同委員会を立ち上げた。

現場から課題や議案が上がると、大瀬教頭が委員を招集して議論し、決定事項をすぐに職員会議で伝えて、学校全体で共有している(18年度は6回実施)。教師間で共通理解を図りながら取り組みを進めることが、スムーズな改革の鍵だと、笠井先生は強調する。

「進路・教務・学年団が個別に動いていては、意思決定が遅れやすく、取り組みの意図も十分浸透せず、効果が限定的になってしまいます。管理職・分掌・学年団の代表者が一堂に会した委員会で、課題がスムーズに共有され、機動的に改革を進めることができました」

18年度入学生を迎えて1年間が経った。改革の最大の成果は、シラバスや自己評価シートなど、コンピテンシー・ベースの教育活動を行う環境が整ったことだ。教師や生徒の「青高力」への理解が深まり、「Classi」も、生徒をより深く見取る上で欠かせないツールになっている。

19年度の課題は、同校の教育活動への保護者の理解を深めることだ。現在、学年通信を学期に1回、保護者に配布し、学力観の転換、大学入試の変化など、教育動向を伝えていくが、十分理解されているとはいえない。そこで、同校の改革のねらいや内容も周知することで家庭の支援を引き出したいと考えている。シラバスやポートフォリオにかかわる課題もあるが、それらはかえって楽しみでもあると、笠井先生は語る。

「初めての取り組みも、まずは始め、実践する中で課題を洗い出し、随時対応していくといった姿勢で進めてきました。課題はありますが、課題を具体的に挙げられるのは、土台ができてきた証拠です。問題があっても、1つずつ着実に解決していくことで、本校が理想とする教育に近づいていきたいと思っています」

*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*2 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。